



馬耳東風

穏やかな陽射しに包まれたゴールデンウィークの間、ふと手にした一つのニュースが思いのほか印象に残った。アメリカFDA（食品医薬品局）が、モノクローナル抗体をはじめとする一部の医薬品開発において、これまで必須とされてきた動物実験を段階的に廃止する方針を打ち出したという。

昨年可決された「FDA Modernization Act 2.0」によって、薬の承認に動物試験が絶対ではなくなったことは耳にしていたが、今回はそれが実際に制度として前進し始めたという点で、大きな節目だと感じた。今後はAIモデルやオルガノイド、*in vitro* 試験といった「非動物的評価手法」が、科学的に妥当であると判断されれば、公式に採用されていく。これは生命倫理の観点だけでなく、研究の再現性や精度の面でも大きな意味を持つ。

この動きは医薬品開発にとどまらず、われわれ獣医療の分野にも間違いなく波及してくる。たとえば実験動物獣医師の役割は、これまでの飼育・管理から、代替技術の評価・監査・安全性確保へと変化していくだろう。また、教育の場面でも、AIを使ったシミュレーションや仮想解剖技術が標準になり、学生が生きた動物に触れずとも高精度な学習ができる時代が来るかもしれない。これまで「現場に慣れるためには実物が不可欠」とされてきた考え方も、少しずつ問い直されていくことになるだろう。

動物実験の削減は一見、臨床とは距離のある話のように思えるが、実は倫理観や社会的信頼という意味で、日常診療にも少なからぬ影響を与える。これからの動物医療は、単に「動物にやさしい」だけではなく、「患者としての動物に対してやさしく、そして科学的にも“動物を使わずに学び・研究し・開発していく医療体系”であること」が求められていくのだろう。

私はこの春、アジア各国をまわる中で、各地で進むAI診断技術の導入や、デジタル化された症例データベースの運用状況を目の当たりにしてきた。中には、医療制度だけでなく、獣医師や獣医療補助者の働き方を大きく変えるような仕組みも現れ始めている。動物と人、医療者と社会との関係性が、再構築されていくのを感じる。特に中国や韓国の都市部では、若手獣医師たちが倫理と技術の交差点に立ち、自らの立ち位置を真剣に模索している姿が印象的だった。

こうした変化は一部の国や地域だけの問題ではない。日本もまた、これら新たな価値観と技術革新が進む時代に、倫理と科学の両面からどう向き合っていくかが問われている。われわれは何を守り、どこを変えるべきなのか。動物たちの命と真正面から向き合うこの職業に、いま改めてその本質が問われているのかもしれない。

一つの時代が静かに、しかし確実に動いている。風薫るこの季節、会員諸兄はこの変化の風を、どのように感じているだろうか。そしてわれわれは、どの方向に舵を切るべきなのだろうか。 (も)